

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22011

研究課題名（和文）平安時代における時代認識に関する研究

研究課題名（英文）The study of the recognition of history in Heian period

研究代表者

小塩 慶 (Oshio, Kei)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：80880765

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：「延喜・天曆聖代」という語があるように、平安貴族は特定の時代を規範とすることがあった。従来の日本史学では特に「延喜・天曆」「聖代」という語に注目して研究が進められてきたが、「聖代」という語が直接記されない事例や「延喜・天曆」以外の聖代についての研究は遅れがちである。本研究では、古記録によって先例のデータを収集し、どのような時代が規範となるかの傾向をさぐり、また歴史物語や説話集において語られる聖代との相違についても検討した。またその調査の中で、先行研究の少ない摂関期以降の祥瑞についての記事も収集し、その実態の解明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

延喜・天曆という時代は、時代によって評価の揺れを伴いながらも、近代にいたるまで日本における模範として仰がれた特異な時代である。その実態が必ずしも「聖代」とはいえないものであったことや、聖代視された要因についてなど、先行研究では様々な観点から検討が加えられている。しかし、聖代と称されたほかの時代との違いや、そもそもなぜ聖代たり得たのかなど、なお明らかでない点も多い。本研究では、特定の時代がやがて実態を離れて虚実交えながら賛美の対象となっていく、その過程の解明を目指す、これは今日の問題にも通ずるテーマであるといえよう。

研究成果の概要（英文）：As suggested by the term the “glorious rule” of Engi and Tenryaku, the aristocrats in the Heian period sometimes respected some previous rules.

Previous studies in Japanese history have been focusing on the terms “Engi and Tenryaku” and the “glorious rule”, leaving the cases without a direct reference to the “glorious rule” or the rules other than “Engi and Tenryaku” little examined. In this study, I investigated which rules tended to be respected by collecting data from old diaries, and examined how such respected rules differed from those referred to in the historical tales and collections of tales. Along with this main research, I collected and examined the examples of auspicious omens (shozui) in the Sekkan period and later, which have been not much examined by previous studies.

研究分野：日本史学

キーワード：時代認識 聖代 祥瑞

1. 研究開始当初の背景

「延喜・天曆聖代」という語があるように、平安時代以降の日本においては特定の時代を「聖代」と呼び模範として仰ぐことがあった。延喜・天曆の聖代については日本史学でも複数の優れた先行研究があり(近年の代表的論考として田島公「延喜・天曆の「聖代」観」(『岩波講座日本通史 第5巻 古代4』岩波書店、1995年)がある)、国文学でも、『源氏物語』の所謂「延喜・天曆準拋説」等により、古くから注目されている。様々な観点から検討が加えられ、議論が出尽くしたかのように思われる延喜・天曆聖代の問題であるが、次のような課題も残されていると考えられる。日本史学の研究では延喜・天曆への関心が突出して高く、それ以外の聖代についての研究の分析は手薄である。わずかに承和聖代については一部で関心を集めているが、寛弘・延久のほか花山天皇聖代観などは、むしろ国文学での研究蓄積が多い。延喜・天曆聖代も、こうした様々な「聖代」の中で相対化していく必要がある。和漢の観点を取り入れた研究が少ないこと。延喜・天曆聖代観成立以前、日本において規範とされたのが専ら過去の中国の治世であったことは軽視し得ないだろう。10世紀以降、平安貴族が日本の中にひとつの規範を見つけていく背景には、国風化の問題も考える必要があろう。以上の通り、の論点が課題として残されていると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、平安貴族が自国の歴史をいかに認識していたかを、その形成過程とともに明らかにすることにある。特に、聖代観に注目したい。こうした時代観はいかにして形成されたのであろうか。従来の日本史学でも延喜・天曆聖代に注目する研究は数多いが、ひとたび古記録や歴史物語、説話集などを紐解くと、それ以外にも重視された時代は多く、むしろ時代観は人や時代によって流動的ともいえる。したがって、そうした時代観の揺れを相対化していく作業が必要となる。また、延喜・天曆は、中国の堯舜や漢や唐と対置する形で永く日本において重視され続けたことでも特異な位置を占める。近年研究が盛んな国風化の問題とも関連して、日本が自国の中に規範を見出す過程を明らかにしていくことも、日本の自己認識を考えるうえで重要な課題となり、本研究の目的のひとつである。

3. 研究の方法

時代観を探る手法として、以下の3つの方法を取り、時代観の形成過程を多角的に検討した。

(1) 古記録から時代観を探る

「上古」「中古」「近代」といった時代区分に関わる語は古記録に散見するが、その用例は実のところ多くはない。したがって時代区分用語のある史料のみを分析の対象とすることは、日記に現れる時代観に関する貴重な情報のほとんどが分析から抜け落ちてしまうことを意味する。本研究では一旦こうした用語からは離れて、古記録を中心とする諸史料に現れる「過去の時代」を全て洗い出す分析手法をとる。これにより、平安貴族の無意識の中にある先例観・時代観や、時代区分語を用いることの少ない記主の日記の分析も可能になることが予想される。

(2) 史論書・歴史物語・説話集などから時代観を探る

鎌倉時代初期までに成立した史論書・歴史物語・説話集から、特定の時代や天皇の治世についての評価がなされている部分を抄出・集積する。また、説話集や歴史物語には、同類の逸話が複数の書物に採録されていることがしばしばある。その出典や影響関係については、すでに国文学研究で多くの研究の蓄積がある。特に聖代観に関係する逸話については、その逸話がいつ生み出されたのかという問題が重要になってくる。そのケーススタディとして、『古今著聞集』で知られる説話と共通する逸話を含み、かつ成立が『古今著聞集』よりも遡る可能性の高い史料に注目し、内容やその逸話の史実性、その伝来についての調査・研究を行う。

(3) 和漢の比較

日本で模範とされたのは、日本の過去の時代のみではない。むしろ十世紀以前は中国王朝を聖代と仰ぐことの方が多し。こうした中国王朝を模範とするあり方がいかに形成されたのかについては、これ自体が重要な研究テーマであり、本研究課題の範囲を大きく超えるため、ここでは『貞観政要』に注目して、その日本における受容の一端を明らかにする。

4. 研究成果

以下、「3. 研究の方法」(1)～(3)の項目に対応して記述する。

(1) 古記録から見る時代観の調査

古記録に見える先例の調査については、本格的な私日記のはじめとされる『宇多天皇御記』以

降、鳥羽天皇の治世である保安4年正月まで行った。これは、本研究で特に問題としたい延喜・天曆聖代観が院政期初めには確実に存在したと考えられ、さしあたりの調査の区切りとしては1120年代頃が適当であると判断したためである。

当初より予想されたことではあるが、11世紀後半については現存する史料が乏しく、活字化されている古記録も多くないため、事例収集には困難が伴った。ただし散逸した日記のほか、『増補史料大成』等で翻刻されている日記（『土右記』『水左記』『帥記』等）においても、未翻刻の逸文は少なくない。そこで部類記等の調査を行い、これらの日記の未翻刻逸文も収集することで事例を充実させることができた。調査では、「上古・中古・近代」等の時代区分用語にはあえて拘泥せず、先例として引勘されている時代や人物を網羅的に調査することで、平安貴族の日記に明確な言葉を以て現れることのない先例観を総体的に把握することを目指した。その際、年月日等が記されない事例に関しても、可能な限り時期を特定していく作業を並行して行った。それぞれの先例の根拠となる史料や言説についてもデータ化することで、個人の知識を構成する基盤や、その特徴・傾向についても一定の知見を得ることができた。この作業によって、特に承和・延喜・天曆・寛弘・延久などの、後に聖代として高く評価されることの多い時代について、それぞれの時代がいつから重視され始め、いつまで重視され続けるのかといった問題について、具体的な見通しを得ることができた。研究期間内には公表に至らなかったが、下記(2)の検討も踏まえて、今後論文化を目指す。

また調査の過程で、これまで研究が十分になされていなかった撰関期以降の祥瑞に関して、従来知られない、あるいは注目されていない事例が複数存在することが判明した。これらの事例を再検討することにより、撰関期以降の祥瑞が六国史以前の祥瑞と様々な面で大きく異なることが判明した。当該期の祥瑞をめぐっては、中国的な思想からの離脱や国内事例への関心の高まりといった点が指摘できる。この内容に関連する口頭報告を、東京大学史料編纂所内の研究発表会（2021年3月）および「日本古代における中国文化受容」研究会（東方学会若手研究者の研究会等支援事業、2021年10月）にて口頭報告を行い、論文化を進めた。

(2) 史論書・歴史物語・説話集などから時代観を探る

(1)の考察の結果、平安貴族の日常の儀式や政務の中で重視される時代と、歴史物語や説話集において聖代とされる時代とは、必ずしも一致するわけではないことも明らかになった。史論書・歴史物語・説話集に見える聖代記述について検討するうえでは、当然ながらその書物がまとめられた時代背景を考える必要があるが、加えて各逸話の成立時期（作品の成立時期とはずれが生じる）を確定していく作業も必要となる。

そのケーススタディとして、聖代について興味深い記述を含む『古今著聞集』所載の説話と一部共通の話を載せる、『齋王記』『助無智秘抄（年中装束抄）』の調査を行った。『齋王記』については現在のところ東山御文庫本のみしか存在が知られない孤本である（翻刻も含め、小倉慈司「東山御文庫本『齋王記』について」(義江彰夫編『古代中世の史料と文学』吉川弘文館、2005年)参照)が、『助無智秘抄（年中装束抄）』については陽明文庫所蔵の古写本をはじめ複数の写本が伝わっている。COVID-19の影響のため思うように写本調査が行えなかったが、紙焼き写真を購入するなどして奥書類を収集したほか、引用される逸話の史実性や年代比定、関係性などについて調査を進めた。以上の具体的な成果内容については今後公表していく予定であるが、従来の国文学研究ではほとんど注目されることのない史料でもあり、分野横断的な史料紹介を目指している。

(3) 中国の聖代の浸透について

唐太宗の貞観の治は、中国のみならず日本でも聖代として認識された。『貞観政要』は日本でも重視された漢籍のひとつであるが、東京大学史料編纂所にて、公益財団法人陽明文庫所蔵「臨時祭之事」(一般文書目録・五二八九九)の紙背として残された新出の『貞観政要』を調査する機会を得た。この新出『貞観政要』は室町時代以前の旧鈔本系『貞観政要』のひとつであり、貴重な史料といえる。鎌倉時代以降『貞観政要』の受容層が広がると見られ、陽明文庫本『貞観政要』も、こうした時代背景のもと書写されたものと考えられる。この新出『貞観政要』の基礎的な考察と翻刻については、小塩慶・尾上陽介「陽明文庫所蔵『臨時祭之事』および紙背『貞観政要』について」(『東京大学史料編纂所研究紀要』31、2021年、担当箇所は『貞観政要』部分)として発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小塩慶・尾上陽介	4. 巻 31
2. 論文標題 陽明文庫所蔵『臨時祭之事』および紙背『貞観政要』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所紀要	6. 最初と最後の頁 pp.75-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小塩慶
2. 発表標題 日本における祥瑞とその展開
3. 学会等名 東京大学史料編纂所第284回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小塩慶
2. 発表標題 摂関・院政期の祥瑞
3. 学会等名 「日本古代における中国文化受容」研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------